

## 「田中光顕の回顧録を読む」解説シート

会期 平成31年3月30日[土]～平成31年4月15日[月]

時間 9:00～17:00 (最終入館16:30)

会場 小田原文学館本館 1階第二展示室内

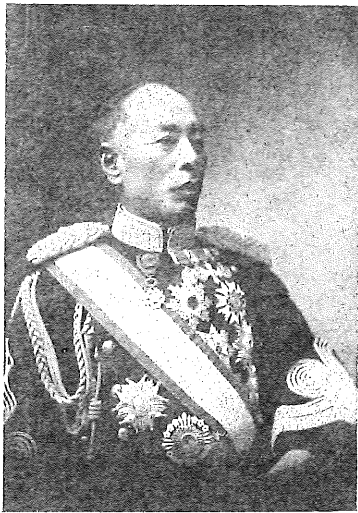
主催 小田原市立図書館

小田原文学館では、小田原出身の文学者や小田原に居住して執筆活動を行った人物を幅広く紹介してきました。今回は、図書館総合歴史講座および明治150年事業の一環として、小田原ゆかりの人物・田中光顕の回顧録をご紹介します。

## 【展示資料一覧】

番号	資料種別	資料名	執筆者・制作者	出版者・年代等	所蔵機関
1	写真パネル	田中光顕肖像写真		慶応4 (1868) 年3月下旬	『憂国遺言』(館蔵)より
2	写真パネル	田中光顕肖像写真		明治33 (1900) 年頃	『田中青山伯』(館蔵)より
参考	複写	叙勲裁可書		明治33 (1900) 年5月	国立公文書館所蔵
3	書籍	『田中青山伯』初版	富田幸次郎	大正6 (1917) 年、青山書院	館蔵 (山縣公文庫)
4	書籍	『維新風雲回顧録』8版	田中光顕	昭和3 (1928) 年、大日本雄弁会講談社	館蔵
5	書籍	『維新夜語』初版	田中光顕	昭和11 (1936) 年、改造社	館蔵
6	書籍	『憂国遺言』初版	田中直樹編	昭和15 (1940) 年、鱗書房	館蔵
7	写真	晩年の田中光顕	秋元写真館	昭和12 (1937) 年～昭和14 (1939) 年頃	小田原市郷土文化館
8	写真パネル	田中光顕墓所			護国寺

## 【生涯】田中 光顕 Tanaka Mitsuaki (1843-1939)



田中 光顕 (『田中青山伯』より)

土佐藩士。勤王運動を経て明治政府に出仕。明治元(1868)年兵庫権判事。4(1871)年、岩倉遣外使節団に加わり欧米諸国を視察。帰朝後、陸軍省に出仕、会計局長を経て、14(1881)年陸軍少将、17(1884)年長官、18(1885)年内閣書記官長、元老院議員、22(1889)年警視總監、23(1890)年貴族院議員等を歴任した。24(1891)年に宮中顧問官に転じ、宮内次官を経て、31(1898)年2月、第3次伊藤内閣で宮相に就任。以後、42(1909)年まで宮相を務め、宮中政治家としての勢力を確立した。また明治維新の志士の遺墨等の蒐集につとめ、青山文庫、多摩聖蹟記念館等を設立。

小田原文学館の建物は、田中光顕の別邸。和館は、敷地内に日本庭園を持つ純和風建築で、大正13(1924)年に建てられた(現・白秋童謡館)。その後、当時の上流階級の間で流行していた造りで、スパニッシュ様式を基本として昭和12(1937)年に竣工した洋館(現・小田原文学館本館)は、当時の小田原町民を驚嘆させたという。

(国会図書館「近代日本人の肖像」参照)



小田原別邸 和館 (現・白秋童謡館)



小田原別邸 洋館 (現・小田原文学館本館)

## 【資料解説】

### 1：田中光顕肖像写真

慶応4（1868）年3月下旬、『憂国遺言』口絵写真

田中 26 歳の写真。『憂国遺言』の口絵には、「東奔西走王事のため席の暖まる <sup>いとま</sup> 違 もなかつた青年時代の田中光顕翁」とあり、維新直前の慶応4（1868）年3月に京都で撮影したことが記されている。

田中は19歳のとき武市瑞山の門下に入り、土佐勤王党に参加して、22歳の時に脱藩した。脱藩後は土佐藩や長州藩の志士らと活動し、薩長盟約締結や長州征討、鳥羽伏見の戦いへの参加などを経て維新を実現した。

この肖像写真が撮影された年には、1月に鳥羽伏見の戦い、3月に明治天皇が五箇条の御誓文を発し、9月に明治改元が行われた。

多摩市教育委員会が所蔵する同じアングルの紙焼き写真には、田中の最晩年にあたる97歳の時に、自筆の和歌と署名が書き加えられている。署名は、「維新残卒 田中光顕」、歌は、「ながいきのすへはいかにと人間はゞ ころされさりし 故とこたへむ」（長生きの術は如何にと人間わば 殺されさりし 故と答えむ）と認められ、田中にとってこの肖像写真が維新を追憶する上での重要な写真だったことがわかる。

### 2：田中光顕肖像写真

明治33（1900）年頃、『田中青山伯』口絵写真

宮内大臣を務めた58歳頃の田中の肖像写真。原資料の所在は不明であるが、写真に彩色を施していると推測される。田中の胸には旭日大綬章がみえるが、明治33（1900）年5月に宮内大臣従二位勲一等子爵田中光顕に「特旨」をもって旭日大綬章が授与され、この写真は授章記念に撮影された可能性が高い。

この時の内閣総理大臣は公私共に関わりの深かった山縣有朋である。

### 参考：叙勲裁可書

#### 「宮内大臣従二位勲一等子爵田中光顕へ旭日大綬章御親授ノ件」

明治33（1900）年5月、アジア歴史資料センター公開、国立公文書館所蔵

Ref. A10112511300、勲 00068100（国立公文書館所蔵）

「明治三十三年五月二日 賞勲局総裁へ訓令案 今般特旨ヲ以テ宮内大臣従二位勲一等子爵田中光顕へ旭日大綬章御親授可相成旨御沙汰ニ付諸事取計フヘシ 内閣総理大臣 宮内大臣従二位勲一等子爵田中光顕へ特旨ヲ以テ旭日大綬章御親授可相成旨御沙汰候条此段及御通牒候也 明治三十三年五月一日 宮内次官男爵川口武定 内閣総理大臣山縣有朋殿」と記載されている。

### 3：富田幸次郎『田中青山伯』

青山書院、大正6（1917）年、初版、小田原市立図書館所蔵（山縣公文庫）

田中75歳の伝記。「青山」は田中の号。

著者の富田幸次郎は、板垣退助の自由民権運動に参加した政治家兼ジャーナリストで「高知新聞」を創刊した人物。本書は、田中が支援した土佐高岡郡勤王家表忠碑の建立を記念して企画された。

前半部は、田中の談話に富田の考察を交え、田中の生涯ならびに土佐の勤王史を綴った内容である。後半部は「青山伯の八面観」と題し、公私を問わず田中と交流があった人々による39篇の回

想録であり、「青山伯と武市瑞山」（中島気崢）、「不磨の勲功」（山縣有朋）、「早稲田大学と田中伯」（市島謙吉）など、田中の政治から文化にまで及ぶ活動の広さや、一本気な人柄を知ることができる。

本書には、幕末維新の活躍だけでなく、文化財保護への学問への理解が深く、漆工や刀剣などの日本の伝統工芸の保護や振興を行ったこと、宮内大臣時代には従来非公開であった正倉院御物や東山御物の学術調査への協力を行ったことなどが記され、教養人としての田中の振る舞いも記録されている。

本書は、公私共に田中と交流が深かった山縣有朋の旧蔵資料である。

## 4：田中光顕『維新風雲回顧録』

大日本雄弁会講談社、昭和3（1928）年、8版、小田原市立図書館所蔵

大正末に84歳頃の田中が維新の頃を回顧した内容。田中の口述を編集者が脚色している。前半は土佐勤王党について、後半の「新撰組の乱入」以降は、田中の体験談である。

大正末から雑誌「講談倶楽部」に連載され、昭和3（1928）年に単行本として出版された。幕末の歴史物語としての脚色がみられるが、維新を体験した田中が語った坂本龍馬や高杉晋作などの志士の活躍は、英雄としての志士像の形成に影響を及ぼしたとされる。

紹介のページは、日露戦争時に、昭憲皇太后の夢枕に坂本龍馬（幕末に海援隊を率いた）が立ち、勝利を予告したというくだりで、田中の創作とされているが、このエピソードによって、広く一般に坂本龍馬の名が知られることになった。

## 5：田中光顕『維新夜語』

改造社、昭和11（1936）年、初版、小田原市立図書館所蔵

94歳の田中が、維新の志士の慰霊と顕彰のために綴った回想録。

田中が経験したことを軸に維新の展開を綴った内容で、「土佐勤王党の手入れ」「俊傑坂本龍馬」など70章で構成されている。『維新風雲回顧録』同様、会話を多用していることや、テンポがよく臨場感溢れる場面展開が行われていることが特徴的で、編集者による脚色がなされ、本書が大衆向けの歴史小説として企画されたことが推測される。

最後の2章には、志士顕彰についての田中自身の考え方が綴られている。田中は志士の忌日には遺墨を奉安し、香を焚いて静かに冥福を祈ることを習慣にしていた。また、供養塔の類は長い年月の間に失われる可能性があるが、記録はたとえ天変地異があっても残るので、「百の供養塔よりも、先づ一の記録であると考え」と述べており、記録を残し後世に伝えることを重要視していたことがわかる。

田中は、大正7（1918）年に臨時帝室編修局総裁（宮内省設置）に就任した。職務内容は、明治天皇の事績を学問的に検証し、国史として記録する「明治天皇紀」編纂事業の統括であり、記録に対する田中の信頼はこのような経験を通じて培われたことが推測される。

紹介ページは、「武市瑞山の最期」の章。田中が師事した武市瑞山は土佐勤王党の結成者。尊王攘夷派が後退した「八月十八日の政変」以降、土佐勤王党は弾圧の対象となり、武市も切腹を命じられた。田中はその壮絶な最期を『維新風雲回顧録』『維新夜語』などで繰り返し伝えている。

## 6：田中直樹編『憂国遺言』

鱗書房、昭和15（1940）年、初版、小田原市立図書館所蔵

97歳の田中の口述を元に秋湖田中直樹がまとめた随筆集。

「はしがき」は田中光顕の署名が付されており、「昭和14年3月」と記載されている。これは、田中が亡くなった月であることから、本書は田中の最晩年の言葉をまとめた随筆集とみることができ

るが、刊行は田中の死後であった。

本書は、148章で構成されている。幕末の志士の話以外に、刀剣、美、馬、女性観の話などテーマが多岐にわたり、田中の人柄や教養趣味の広さが窺われる。「猶太」「国体」「遊就館」など戦時中の世相を反映した章がある。

紹介ページは、西郷隆盛の最期の様子を伝える「城山」の章。田中は、高杉晋作と西郷隆盛に心服していた。西南戦争において田中は官軍側の会計部長であった。「攻める方も攻められる方も皆かつての同志である。それはじつに忍び難いことであつた」という言葉には、公私を通じて西郷や桐野千秋と交流があった田中の無念の想いを読み取ることができる。

## 7：晩年の田中光顕

昭和12（1937）年～昭和14（1939）年頃、小田原市郷土文化館所蔵

小田原本町に所在した秋元写真館の撮影写真（撮影者が秋元敬治か）。小田原別邸の洋館（現・小田原文学館）のテラスで寛いだ様子の田中の姿を写し出している。スーツにハットという洋装であり、田中の笑顔を捉えている点でも珍しい写真である。

小田原の洋館が建立されたのは昭和12（1937）年、田中は昭和14（1939）年に97歳で亡くなっているので、この写真は田中の最晩年の姿である。田中が小田原別邸に滞在した記録はほとんどなく、田中と小田原別邸のつながりを伝える貴重な資料といえる。

別荘は個人所有を経て小田原市の所有となり、洋館は平成6（1994）年の小田原文学館開館時に本館として公開を開始し、大正13（1924）年に建てられた和館は平成9（1997）年に公開を開始し、平成10（1998）年に白秋童謡館となった。

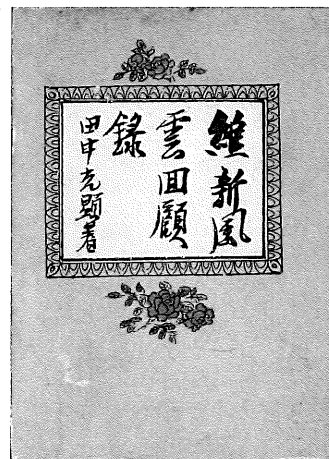
## 8：田中光顕墓所

東京・護国寺

田中光顕と先祖の墓碑（「従一位勲一等田中光顕之墓」「田中家先祖濱田氏累代墓碑」）は、本邸・蕉雨園を構えた目白からほど近い護国寺に所在し、田中の墓域は山縣有朋、大隈重信の間にある。護国寺には、皇族の墓所豊島岡墓地が隣接している。



1 田中光顕肖像写真



4 田中光顕『維新風雲回顧録』

小田原文学館 特集展示

「田中光顕の回顧録を読む」

発行 小田原市立図書館

印刷 平成31年3月 ※無断転載を禁じます